



# おはようロスアンゼルス

倫理研究所U. S. A. 南カリフォルニア倫理の会  
2202 W. Artesia Blvd. Unit L Torrance, CA 90504 Fax: (310) 323-6737

2月号会報

2013年(平成25年) 2月 1日(金)

NO. 138

## 全一統体の原理

「倫理」を支える七つの原理のうち、いちばんの核心をなすのが、「全一統体の原理」です。聞き慣れない、いかにも難しそうな名称ですが、「全」とは世の中のもの、一つとしておなじものはない一切の形あるものを指します。「一」とは、そうした現象界を越えた幽なる世界のこと、目にも見えず、耳にも聞こえない隠れた次元で、「純一界」とも呼びます。

「全」の世界、すなわち現実世界のあらゆる物事は、見えない次元で一つに統べられている。バラバラに生起すると思える現象も、実はすべてが人間の五官を越えたところで、網の目のごとくからみあい、関係しあつて、一糸乱れぬ秩序の中に統一されている。—このことを「全一統体の原理」といいます。

宇宙大のマクロの世界に目をやれば、日月星辰が規則正しく運行し、四季がうつり、昼夜がめぐっています。ミクロの世界でも同様に、遺伝子や原子がその基本構造を保ち、一定の法則のもとに物質

や生物の多様な特性をつくりあげています。マクロにおいてもミクロにおいても、あらゆる現象が不思議な規則性に基づいて生起していることが分かります。

見えざる次元の統一の力は、自分の肉体を考えればいちばんよく納得できるでしょう。命じもしないのに心臓は動き、呼吸し、消化排泄し、眠れば目覚めます。あらゆる生理現象が、実にみごとに調和協調しつつ営まれているではありませんか。それは「生命」というただひとつの力によつて、統御されているからにほかなりません。マクロからミクロに至るまで、世の中は一個の生物のごとく有機的に、ただひとつの統一の中に動いているのです。そこには一つの例外もありません。

(中略) ここで言う超感覚の世界、「純一界」は科学的な理論や宗教的な信念とか信仰の対象ではありません。あくまで「倫理」の実践という生活体験を通して発見されたもの、「倫理」を実践すれば誰もが確実にその存在を認めることのできるものです。

(『純粋倫理入門』より)

## 吉川和儀 倫理セミナー 出張

二月十七日(日)

午前十時三十分

テーマ「社風の源」

プロフィール

吉川 和儀

(よしかわかずよし)

経歴

・一九六五年 東京都江戸川区に生まれる

・一九九五年四月 社団法人倫理研究所に入所

・ 法人局 普及事業部 次席

東海・北陸方面 方面長



たくさんの方にお声を掛けてセミナーに来て頂きましょう

## お雑煮会

一月十三日(日) 午前十一時より倫理オフィスにて開か

れた。取り皿の上には会員自慢の手料理が所狭しと並んだ。橋勝雄普及部長の挨拶の後、滝川政和ディレクターの音頭で乾杯。

滝川政和氏は一月に八十八歳になられる。サプライズで

用意されていた米寿のお祝いケーキをカットする段になり、主役の滝川政和氏が途中で抜けられていることに気がつき、急遽、歌子夫人がケーキを前に記念写真に納まった。デザートを食べ終わった頃に戻った滝川氏のために、ハッピーバースデーの歌を皆で大合唱した。次に昨年のモーニングミックサーの参加日数の多かった人達にプレゼントが贈られた。

五十三日 大島藤江

五十二日 氏家正子 橋勝雄

土佐美代子

五十一日 伊澤潤子 梅本豊

造 草野律子

ゲームコーナーでは、プレゼントの前に、会員一同の目色が変わり、大はしゃぎ。最後に川田会長の用意したボケ防止の為に、体と頭を使いながらリズムに乗せて楽しむゲームをした。練習段階で脱落者が続出し、一度も本番に入ることなく、「この会ではこのゲームができないことがわかりました」という会長のメの言葉と共に大笑いの中、お雑煮会もお開きとなった。出席者二十八名

(草野律子記)

おめでとうございます

『しきなみ』一月号

二席 ホン史子 群螢集 (東京)

大粒の雨が打ちゆくコンクリート埃 (ほこり) の匂いたちまちに立つ

(評) 大粒の雨によって立つ埃の匂い。久し振りの雨と思われる。鋭い感覚が際立つ。

丸本玉代選

入選 梅本豊造 群螢集 (東京)

入選 松元依子 飛雲集 (西東京・海外)

『秋津書道』一月号 (競書)

四席 滝川政和 芸術部 (東京)

二席 堀井幸江 高等部 々 草書

入選 梅本豊造 々 々 草書

三席 咲田静子 一般部 (東京 東部) 草書

六席 前田グレース 々 (東京) 行書

四席 竹内康子 々 (東京) 楷書

二席 滝川政和 芸術部 (人の部) 調和体

三席 梅本豊造 高等部 々 々

入選 咲田静子 一般部 々 々

羅府新報新年短歌

天位 ホン史子

カーテンを開けて初日を共に見る介護の職場に休みはあらず

秀逸 松永典子

秋の風白くまっすぐ駆けてゆく松葉杖つく夫の背たたき

佳作 松永典子

松葉杖たよりに歩む夫の背に人の励ましありがたきかな

佳作 摺木洋子

例えればコントラバスのような人意中の彼を表現する娘 (こ)

山公園野兎群れて草を食 (は) む朝靄うすれ日出ずるらし

秋津書道—調和体 (十二月号です。)

一席 咲田静子

一般部



1席 南カリフォルニア 咲田 静子  
大胆に無を主張しながら全体がまとまっています。

しきなみ短歌

詩を紡ぎメロディー奏でてゆく人の歌声聴きたびとろけてしまふ 草野律子

川もなく砂漠の山の青き空トンボ飛びかいた秋の気配す 摺木洋子

教えたる夫より多くつる魚孫の成長嬉しくもあり 滝川歌子

しとしとと小雨降る日となる師走入り寒さひとしお病む身の我に 奥本洋子

葉陰より顔のぞかせる柿の実は夕日をうけて秋色となる 杉野和子

「モッタイナイ音頭」を踊る四世達甚平やゆかたにハチ巻きしめて 長谷川公子

古来よりあまた歌わるる満月を今宵は我の番と詠みおり 塩出笑子

朝おきて笑顔を鏡に映しつつ今日も明るく前に進まん 橘高比呂美

スターフルーツグアバにマンゴー籠に盛り南国気分師走の夕げ 伊澤潤子

裏庭の熟した柿をチュンチュンと話しつつ食む二羽のすずめは 梅本豊造

十キロのターキー焼くと夫勇む調理検査インターネットで 梅本和子

川の字に寝 (い) ぬるがごとく温かし父母の遺影の見下ろす寢床 門園美枝子

秋の日の差し込む厨に置かれたる渋柿の朱は固く艶めく ホン史子

八の字に松葉杖使い歩く夫十センチの段にもれるため息 松永典子

解け初むる雪道行けばザクザクと足裏に生る音心地良し 伊勢田豊

久々に訪いしクブチの木々の繁り十三年の努力を思う 矢口裕司